



【研究発表】 ※6 月定例会で発表予定のテーマでしたが、開催中止となったため、今号にて要旨をご紹介します。

手稲の政治・経済界を動かした「みどり亭」

手稲郷土史研究会 会員（相談役） 一ノ宮 博 昭



手稲唯一の料亭『みどり亭』の当主・萬田茂次氏は、手稲を舞台にした実業家として稀代の一人だったといっている。時代を読む眼力は鋭く、その知恵と行動力で財と名誉を手にした。昭和初期から手稲に居をかまえた人で『みどり亭』を知らない人はいない。

古い「軽川市街図」を見ると、今の手稲本町 2 条 3 丁目辺りの街道筋に「加賀屋」というそば店が見える。これが萬田家の手稲の始まりだった。北陸出身と聞いたように思う。大正末期から昭和初期にかけ、「手稲鉾山」が本格的掘削を始めようとしていた。金山地区は炭鉾の長屋のように鉾員住宅が軒を並べた。萬田氏はここに目をつけた。

軽川駅（手稲駅）周辺には飲食店、料理屋、雑貨店などが軒を並べていた。雑貨店では“もっさり酒”を楽しむ買い物客がたくさんいた。が、こんな商売では利潤も少ない、思いっきり豪華な施設にしなければと考えた。たまたま「北海道造林合資会社」の役員だった近藤新太郎氏の私邸が売却されるとの情報に接した（沖田紘昭氏著『北海道造林合資会社物語』に詳しい）。

「加賀屋」の隣に「藤川薬店」があった。萬田氏は薬局から 1 万円借り入れ、これを原資に近藤宅を手に入れた（現在の手稲本町 2 条 4 丁目）。

近藤氏の私邸は由緒ある建物だ。昭和 5 年 7 月、近藤氏が 66 歳の時に書かれた日記がある。それによると、昭和 2 年 7 月、公爵・徳川慶久が道内視察で温泉旅館「光風館」に宿泊したおり、実枝子夫人、喜久子姫（後の高松宮妃）が近藤氏宅で一時を過ごしたという。近藤氏は自宅の一室を改装し、総ヒノキ造りとし、欄間も手彫りの彫刻であしらったという。日記には「家族一同と記念撮影も許され、我が家末代の栄誉に浴した」と記している。こんな由緒ある建物だったので、萬田氏はいかに料亭とはいいながら、酔客に利用させるわけにはいかないと“開かずの間”にしたと、軽川の古老たちはささやきあったが、真偽のほどは定かでない。

料亭というからには、芸奴がいなければ話にならない。萬田氏は東京新橋まで出向いて「小春」を招き入れた。小春こそ、尼港の日本人虐殺事件の復讐と称してサハリン沿岸を荒らした海賊の首謀者で「光風館」に潜伏し軽川駅で逮捕された江連力一郎と内縁の妻お梅との子供だったという。

このほか、ゆき子、のり子などと名乗る女性がいた。中でも「ひな奴」が人気の頂点にいたが、新雪降った日の朝、玄関先で除雪中、心臓病で急死した。いずれの女性も本名、年齢、出身地は不明だ。夜ごと、夜ごと、三味の音や芸奴、女給たちの甲高い嬌声が巨木の生い茂る林間に響いたことだろう。



大正期撮影の近藤新太郎邸（手稲記念館展示写真より）

『みどり亭』は、とうてい軽川の商店主や周辺農家の主人らが入り出できる施設ではなかった。主要客は産金報国時代の「手稲鉱山」の幹部たちだった。宴会の写真が残っているが、三菱本社幹部、政府高官らへの接待だったのだろうか。

時に、村や町時代に役場幹部や軽川の主要議員らが集って、商店街の振興策や自治体の行方などについて、議論を重ねていた可能性は十分ある。私の父親も町時代の最後の議員の一人だったが、『みどり亭』の会合に出てきたという話は聞いたことがない。

当時、3円も出せば、そこそこの宴会になったというが、ある時、鉱山から一人20円のお膳を出せと注文が入った。驚いた萬田氏は二条市場まで出向き、軽川では見たこともない魚を買い、煮たり、焼いたりして三の膳にし振る舞った。また、見るからに鉱山の鉱夫らしい3人組が現れ、現金の持ち合わせがないが、これで飲ませてくれと言って、鈍く光る鉱石を出した。萬田氏は一目で盗品とわかったが、存分にどうぞと部屋に通した。3人も酔いつぶれるほど飲んだが、まもなく逮捕された。鉱石を密かに持ち出して琴似の歯医者に卸し、この医者は自宅の物置で精錬し金歯を作ったという話も聞いたことがあるが、これはたぶんウソだろう。



人気芸妓「ひな奴」
「美どり亭内 ひな奴」と
万年筆でサインが！



宴会風景（撮影年不明）

暖を取るための火鉢やゲートル代わりの長靴下が見える



芸妓たちの練習風景（撮影年不明）

『みどり亭』の借財はわずか1年で返済できた繁盛ぶりだったが、鉱山の衰微とともに料亭としての勢いも薄れ、やがて下宿屋の「みどり荘」に変身する。私がスーツを着始めたころ、クラス会を開いたことがあった。萬田氏の信用度は次第に高まり、公職も増えていった。町教育委員長、消防団副団長、初代公民館長、一万歩あるく会初代会長などなど。消防功労で叙勲も受けている。

手稲中央小学校が開校100年を迎えた昭和59年、記念事業協賛会副会長の萬田氏から私が組織部長に指名された。終わって同窓会を再編することになり、氏が初代会長となり、私は総務部長に指名され、びっしりお付き合いをいただいた。

目先の事業の展開に追われ、『みどり亭』については聞いたことがなかった。郷土史研究会で『みどり亭』が見直されている今、なぜ、このテーマをもっともっと掘り下げて聞いておかなかったのかと悔やまれてならない。氏は平成6年8月逝去した。

*** 追記** 私は、平成22年5月12日の例会で『みどり亭』を取り上げ、同年6月9日付の会報『郷土史でいね』第30号で、当時の広報担当 釣本峰雄氏によって講演要旨が記録されている。今年度、研究部の厚意で「新会員が多くなっているため 同じテーマの再演もかまわない」と判断いただき、6月10日の例会で再登場する手はずとなっていた。しかし、新型コロナウイルスのあおりで流会となってしまった。年度内に改めての登壇が確定とうかがったが、発表に先駆けて予告のつもりで拙文をしたためた。

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲の下水道の歴史」／高松康廣氏（元札幌市建設局職員）

8月12日（水）18：15～／手稲区民センター3階 視聴覚室／当研究会の会員でない方の聴講も可

【つれづれ随想】

「石狩街道」の名残を探して…

『石狩街道』と聞いて思い浮かぶのは 創成川沿いから石狩市街へと抜ける国道5号-231号ですが、現在の道道44号「石狩手稲線」も、かつては『石狩街道』と呼ばれていました。札幌本府が置かれた当初から 小樽との運輸・交通の主要な中継地点だった軽川と、イシカリ場所の交易で古くから開けていた花畔とを結ぶ約10kmのこの直線道路は、明治10年代にはすでに開通していたといわれます。

いまはほとんど忘れられた街道の名が 目に見えるカタチで遺っていないか、探訪してきました。きっかけは、道道に沿って走る細い水路です。数年前、その名前が「石狩街道排水」で 新川(原野大排水)につながることを知り、泥炭湿地を切り拓いた先人の労苦に思いを巡らせました。もしや水路に架かる橋に銘板が、とくまなく探しますが、見つかりません。ならば 電柱名や事業所の看板はどうかと見上げますが、こちらも空振りに終わりました。

そこで気づいたのが、川の設備。私の住む町内を流れる三樽別



道道に沿う水路「石狩街道排水」
(中央バス「手稲高校前」停付近)



2017年版「札幌市河川網図」より抜粋



街道の名を冠した設備「石狩街道樋門」



川では、増水時の水位を調整する樋門や樋管に 手稲で最初にできた工場の名前が記されているからです。はたして「新川中央橋」のすぐ横で、「石狩街道樋門」が確認できました。道道「石狩手稲線」が『石狩街道』であったことの動かぬ証拠です。スッキリ！

これだから、“歴史のカケラ探し”はやめられません。コロナ禍にあって、好奇心は不要不急なものばかりに向いてしまうと、苦笑いの一日でもありました。菅原純子(手稲郷土史研究会 会員)

※札幌市教育委員会『さっぽろ文庫1 札幌地名考』、札幌市『手稲町誌』、手稲連合町内会連絡協議会ほか『手稲開基110年誌 手稲の今昔』、札幌市『札幌市公共下水道台帳施設平面図』、札幌市『札幌市河川網図』などを参照しました。



研究部からのお知らせ 今年度はコロナ騒動のため、研究発表の予定が大きく変わっています。定例会が中止となった5月、6月分の発表を、冬場に移行しました。また、シベリア抑留体験の語り部・西野忠士氏には10月にご登壇いただくこととなりました。下表をご参照ください。

開催日時	演題(仮)	発表者	
9月9日(水)18:15	手稲鉱山を拓いた人々 ―その光と影―	鈴木清士	手稲郷土史研究会 会員
10月14日(水)18:15	シベリア抑留 ―体験者・西野忠士翁に聴く―	建部奈津子氏	シベリア抑留体験を語る会 札幌
11月11日(水)13:30	明治期における「新川」事情	榎本洋介氏	札幌市公文書館
12月9日(水)13:30	ウシのはなし 手稲の政治経済界を動かした「みどり亭」	石原重隆 一ノ宮博昭	手稲郷土史研究会 会員 手稲郷土史研究会 会員
1月13日(水)13:30	植物観察のたのしみ	原田和彦氏	やまなみ手稲
2月10日(水)13:30	前田農場 小作農のたたかい	竹内伸仁	手稲郷土史研究会 会員
3月10日(水)13:30	私の住む土地の歴史を掘る 画家 富樫正雄と手稲	濱埜静子 乙黒通子	手稲郷土史研究会 会員 手稲郷土史研究会 会員

令和2年度の郷土史研究会の事業が本格始動！

手稲郷土史研究会では、例年4月に『定期総会』を開催してまいりましたが、「新型コロナウイルス感染症」の影響を考慮し、令和2年度は一堂に会しての『定期総会』は取りやめ、書面による審議とさせていただきます。

4月6日付で全会員に「定期総会議案書」をお送りし、第1号議案「令和元年度事業報告」、第2号議案「令和元年度決算報告」、第3号議案「令和元年度会計監査報告」、第4号議案「令和2年度事業計画(案)」、第5号議案「令和2年度予算(案)」、第6号議案「役員選任」のそれぞれについてお諮りいただいた結果、5月15日付で事務局原案のとおりすべて承認されました。6月の定例会においてご報告の予定でしたが、開催が中止となったため、小紙にてお知らせいたします。

各事業が、ようやく本格的に動き出しました。9月には、当別町や北区篠路地区への『視察研修旅行』も予定されています。一層のご理解とご協力、行事などへのご参加をお願いいたします。

なお、令和2年度の役員はつぎのとおりです(敬称略)。会長＝永井道允(兼資料部長)、副会長＝立花邦雄(渉外担当)・乙黒通子(兼研究副部長)、事務局長＝林俊一、理事＝斉藤隆夫(総務部長)・石原重隆(会計部長)・沖田紘昭(研究部長)・濱埜静子(研究副部長)・菅原純子(広報部長兼資料副部長)・佐々木光男(広報副部長)。また、相談役には鈴木清士・一ノ宮博昭、監事には大沼靖男・釣本峰雄の各氏が就きました。よろしくお祈りいたします。



★「手稲歴史資料展示コーナー」の展示替え 手稲区役所1階の情報提供室には、区民に気軽にふるさとの歴史に触れてもらおうと「手稲歴史資料展示コーナー」が設けられています。

手稲郷土史研究会では区と連携してその運営の一端を担っており、7月から『手稲最大の産業遺産 金が採れたヤマ「手稲鉱山」』をテーマとした展示が始まりました。手稲のまちの発展に大きな影響を与えた「手稲鉱山」の沿革史や作業工程、住民生活、産出鉱物などについてパネルで概説(原案:村元健治会員)したほか、ガラスケースの中には手稲鉱山で採取された鉱石の実物など貴重な史料も展示しています。ぜひ足をお運びください。

また区役所3階には、三菱マテリアル株式会社提供の鉱山の精巧な模型も置かれています。こちらも併せてご覧ください。



案内リーフレット

★手稲郷土史研究会の入会案内ができました 「手稲郷土史研究会ってどんなことをしているの?」「入会の手続きは?」「友人を誘いたいんだけど 資料があれば…」などの声にお応えし、このたび、A4判・三つ折りのリーフレットを作成しました。「ふるさとの歴史を掘りおこし 次代へ伝える」をキャッチフレーズに、当会のさまざまな取り組みを紹介しています。どうぞご利用ください。